

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとじていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなごどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのごどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたらうというようにきよるきよるしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやっってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていました。また思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生、先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなりましたし狸さんのお父さんもなりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはいあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気などなおしてやったことはないからな。もっとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。ははん。」ゴーシュは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野嵐のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児はどうせ病気になるならもっと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるというしよにぴたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださいさらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびっくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。